

梁山丁の歩み(上)

李

青

梁山丁(一九一四年十二月)は「満洲」時代に多彩な文筆活動で、もつとも活躍していた作家の一人である。中学時代から文学に興味を持ちはじめ、以来、多くの小説、詩歌を創作し、一躍「満洲」文壇の脚光を浴びる人物となった。

東北の風土、人情、貧しい人々の生き様を豪放な筆致で巧みに表出するのは梁山丁文学の作風である。梁山丁は始終、「現実を暴露」し、「郷土を描く」ことで、己の創作精神を貫いてきた。長編小説『緑の谷』の発表は「現実暴露」による梁山丁独自の「郷土文学」を地位を固めた。

梁山丁は「満洲」時代、北京の逃避行、一九四九年以後の共産党政権の中で波乱の人生を送ってきた。一九五八年の反右派運動と文化大革命などの一連の政治運動に

巻き込まれ、理不尽な批判を受け続け、二十二年間もの囚人生活を余儀なくされた。文学活動も当然、長い歳月にわたって、中止させられた。だが、梁山丁は「満洲」時代に多くの作品を残してくれた。かれの作品を通じて、芸術の生命力を感じさせられる。梁山丁が創作の黄金時代に書き残してくれた数多くのものを整理することによって、「満洲」時代の種種相をより一層解明することができる。と信じている。

このたび、梁山丁夫人の李素秀女史に貴重な資料を提供していただいた。これによって、真の作家—梁山丁の姿を読者の前に呈する一助とすることができれば、甚幸である。

一九一四年——一九二九年 一歳——一五歳

一九一四年十二月三十一日（旧暦十一月十五日）遼寧省開原県老城四根旗杆胡同のある貧しい家庭に生まれる。

本名は梁夢庚、また鄧立ともいう。ペンネームには小倩、梁倩、菁人、梁、阿庚、山丁、梁山丁などがある。

梁山丁の本籍は河北省冀州である。父は梁書礼、字は鉄橋である。河北省冀州から避難してきた農民で、後に、遼寧省開原県老城に落ち着いた。母は鄧氏という。左官の娘である。父は三十歳になって、ようやく結婚できた（母は娼婦であり、梁淑芸と梁淑琴という二人の娘を連れてきた）。当時、梁家は家も土地もなく貧しかった。父が日雇い工をしたり、新聞を売ったり、母が裁縫をしたりして生計を立てていた。

母の話では梁夢庚が生まれた時、寒さのため凍死しそうになったが、母の体温と姉の梁淑芸が借りてきた木炭で火をおこし、一命を取り留めた。梁夢庚が中学に入った時、父がようやく哈爾濱近くにある陶頼昭という町で仕事を見つけた。これによって、一家は開原老城から北満の田舎に移った。

梁夢庚には実の兄弟が二人いる。弟の梁夢庭は一九八二年春に病死した。妹の梁淑蘭は小学校の教師、中学の校長を務めたことがあり、すでに定年退職している。母

は貧しさと過度な労働のために一九四四年に病死した。

母を記念して、鄧立というペンネームをつけた。父は解放後に再び開原県老城に戻り、一九六九年冬に九十二歳で世を去った。

梁夢庚は七歳の時から三家子で一年ほど私塾に通い、封建的な啓蒙教育を受けはじめた。

この後、開原県立第四小学を卒業し、陶頼昭で中学を卒業した。

一九二九年に母の希望に従い、故郷の開原県立師範中学校（現在の老城四中）に入学した。当時、東北では青天白日旗に旗頭を変えた。五月九日は国恥記念日であり、梁山丁は日本の侵略に対して憤慨し、新劇『一片愛国心』の演出活動に参加した。小さいながらも、日本の侵略に反抗する志をえた。

一九三〇年 一六歳

高校に入学してから、梁山丁は辺燮清先生（燕京大学卒業、黄埔軍校出身、中共黨員）と出会った。辺先生の指導の下で、新しい文学作品に触れるようになる。たとえば、魯迅の『呐喊』、蔣光慈の『鴨綠江上』、郭沫若の『女神』および茅盾、丁玲の小説などを讀んだ。また上海で出版された『文芸新聞』（左聯の刊行物）の販売を取

りついだりした。

ある冬休み、帰省の列車の中で、奉天（瀋陽）の『氷花』編集部全格平と知り合った。そこで、『氷花』が東北大学の学生によって編集されたものであると知った。『氷花』に啓発され、また辺先生に励まされて、クラスメートの修園無などと文芸雑誌『紅蓼』を創刊した。しかし、『紅蓼』は第二刊が出たところで、学校側に停刊させられた。

月に四回発行される『開原日報』学生版の編集を手伝った。そこで手に入れた二元の収入は、食費と宿泊費にあてた。

この年の秋、開原の田舎の小作人が地主の脱穀場を燃やすことを題材にした『火光』という小説を書き、『氷花』編集部に送った。

さまざまな原因から、恩師の辺先生も学校を離れ、華北へ旅立った。しかし、先生との連絡は絶えなかった。

先生は手紙のなかに、続けて学校にいけるよう援助すると書いてきた。

一九三二年 一七歳

春、小説『火光』が東北大学の刊行物『現実月刊』創刊号に発表された。編集後記に激励の言葉があった。以

前の『氷花』編集部の学生は、みな東北大学に合格したので、『氷花』を停刊し、代わりに『現実月刊』を創刊したのである。

丁玲小説集『暗闇の中で』を読んで、大いに啓発された。

夏休み前に、父母の言いつけで田舎に帰って二歳年上の呉榮秀と結婚した。新婚三日目に、また学校に戻った。

「九・一八」事変「日本では『満洲事変』と称する」後、東北は日本によって占領された。いたるところで略奪と殺戮がおこなわれた。学校では安心して勉強できなくなり、学校を離れた。しかし戦争で実家には帰れず、同母異父の上の姉梁淑芸の家（開原県老城大獅子溝にある辺鄙な小さな山村）にやってきた。

しばらくの間、ここで生活した。戦乱のため、この地域では常に「匪賊」に騒がれた。梁山丁自身も「匪賊」の襲撃から避難する経験をした。しだいに、「匪賊」は日本人と貧しい人々を搾取する大地主をやっつけて、一般の民衆にはあまり被害を加えないことに気づいた。この経験は後の小説『緑の谷』に素材を提供した。

ここで散文『山溝雜記』を書いて、『大同報』副刊で発表した。

この年、長女―大菊が誕生した。

一九三二年 一八歳

春節に大獅子溝から三岔河の両親のもとへ帰り、妻や兄弟と団欒のひとつをすごした。

一週間後に義父が校長をしていた三岔河小学校で教員となった。高校をまだ出ていないにもかかわらず、家庭の生計を背負わなければならなくなった。

生活のために、税務局徐検査長の家で家庭教師もした。検査長は熱心さを認め、税務局の文章記録員の職を紹介してくれた。

一九三三年 一九歳

税務局では書類などを写したりする仕事をした。仕事が終わった後は、創作に没頭できた。

この期間中に、『大同報』編集人李黙映と知り合い、『大同報』の『夜哨』と大連の『泰東日報』の『文芸週刊』に原稿を書くようになった。

この年に、ペンネーム梁倩で小説『象と猫』、『臭霧中』、『ある犯人』、『あなたにも良心がある』、『男前』などを発表した。

三岔河郵便局の職員孫蘆生（孫陵）と知り合い、親しく交際した。

淪陷時期の東北新聞の副刊は一種の文芸現象として存在していたが、民族解放の戦いと密接に関係している。

一九三二年、楊靖宇は中共哈爾濱市委員会書記として、金劍嘯、羅烽などに進歩的な青年を団結させ、文学の陣地である新聞の副刊を占領するよう指示した。かれらは進歩的な作家蕭軍、蕭紅などと一緒に偽政府が管轄している『大同報』の編集人陳華の人脈を利用し、一九三三年八月六日に副刊『夜哨』を創刊した。山丁も陳華の紹介で蕭軍（三郎）、蕭紅（悄吟）、白朗（劉莉）、巴来（金劍嘯）と知り合った。

冬、蕭軍の招きで、哈爾濱に向いた。そこで蕭軍、蕭紅と会った。二人は山丁に『跋涉』をおくった。さらに、羅烽、白朗を紹介した。それから蕭軍、蕭紅、羅烽、山丁の四人で意義のある記念すべき写真（蕭紅記念館に現存）をとった。

この哈爾濱行きは文学創作にとって大きなプラスになった。哈爾濱は山丁の文学の故郷と言うことができる。

一九三四年 二〇歳

石城税務局の係長に就任した。

白朗が『国際協報』副刊を主宰し、山丁に『文芸週刊』の特別原稿提供人を務めてもらった。相継いで『九

日間の夜』『北極圏』『銀子の物語』『考証の術のないニュース』、および詩『母と子』を発表した。

五月に蕭軍が石城まで山丁に会いにきた。蕭紅と哈爾濱を離れることを告げられた。この日の夜、蕭軍は山丁に二つのアドバイスをしてくれた。一、副刊に依存せず、単行本を出す。二、郷土の現実を暴露することからやりはじめ、「現実の暴露」と「現実の描写」の手法で創作活動をする。

蕭軍を見送ってから、『石城道——友人に送る』という詩を書いた。この詩は、一九四一年出版の山丁詩集『季季草』をはじめ、一九九一年出版の『梁山丁詩選集』にも収録されている。

蕭軍、蕭紅は六月十二日に東北を去った。しばらくして、山丁は白朗から羅烽が逮捕されたので、関係書類や手紙を消却し、今後は金剣嘯と連絡するようという手紙を受け取った。手紙は暗号で書かれていたはずである。この年に、金剣嘯の紹介によって、金人、小古、楊朔と知り合った。

一九三五年 二一歳

春、再び哈爾濱に向かった。砲隊街に住んでいる金剣嘯とはじめて会った。初対面にもかかわらず、二人は古

い友人のように語り合った。金剣嘯を回想する文章の中で、「この日、われわれは随分遅くまで起きていた。わたしの脳裏に新奇な彩られた雲が漂っている。私の理想を自由自在に飛ばせて！翼のついている天馬のように。」と記している。金剣嘯の影響を深く受けていることを窺い知ることができる。山丁の思想はまた革命文芸思想によって深められた。

夏、吉林省永吉市で税務講習所の学習に参加したとき、偶然、孫陵に会った。孫陵は新京（長春）で『大同報』の副刊『満洲新文壇』を編集しており、山丁に原稿の依頼をした。小説『歳暮のニュース』、『我慢している人々』などを寄稿した。

一九三六年 二二歳

学士の資格を取得するために、満洲大同学院の二部に四期生として入学した。

十一月から一か月間、日本へ卒業旅行をした。帰国後に、『訪日随想』という散文を学校の紀要に載せた。

箔をつけ、高等教育を受けたので、北満にある小さな駅から「満洲国」の首都新京（長春）に転職された。長春では友人の孫陵、吳瑛、吳郎、李默映……に再会した。かれらに励まされて、二年ぶりに創作活動に取り組んだ。

小古が長春にやってきて、金劍嘯が処刑されたと山丁に告げた。一九四〇年に山丁は金劍嘯を追悼する詩を書いた。

八月に李默映と長春を離れる孫陵を見送った。孫陵はそれから台湾に行った。

一九三七年 二三歳

文壇で二年間沈黙した山丁は、「山丁」というペンネームで新しい作品を発表し、思わぬ論争を巻き起こした。

当時、日本と「満洲国」偽政府は移植文学を主張した。日本の文学、芸術をそのまま「満洲国」に移植することである。しかし、山丁は郷土文学を提唱した。それは農民の生き様、真の生活を描き、現実を暴露することである。このようなやり方は事実上、移植文学への挑戦と言える。

一九三七年の春、劉遲（疑遲）が『明明』という雑誌で『山丁花』を発表してから、山丁は感想文『郷土文学と山丁花』をさっそく寄せた。これに対して、芸文志派の古丁が大いに不満を漏らし、山丁のことを「むやみに決めつける」と揶揄した。これによって長時間にわたる芸文志派と文叢派の論争が繰り広げられた。

この後、山丁はまたもう一編の『郷土と郷土文芸』を書いて、雑誌『斯民』に載せた。

この年の春、夫人の呉榮秀が二人の娘を連れて、長春にきた。まもなく、長男の梁大成が生まれた。

一九三八年 二四歳

短編小説『機織り』、『壕』、『山風』を書いた。長春文叢派同人および奉天（瀋陽）文叢派同人の王秋螢、佟子松と文壇における親友となった。かれらは大型雑誌『文選』にも小説を書いた。山丁の小説『狭街』、『鎮集』は『文選』の創刊号に載せられた。

益智書店の冷歌に連絡を取り、『文芸叢刊』の単行本を出版した。一冊目は呉瑛の『両極』、二冊目は山丁の短編小説選集『山風』であり、合計九つの短編が収録されている。序に代えての「わたしと文芸」と後書きも書いた。三冊目は梅娘の『第二代』、四冊目は秋螢の『去故集』である。これら四冊が出版されると、文芸界に大きな反響を呼びおこした。評論家の陳因が『山風』を評する、『孟素が『山風』と作者』の評論を出した。後に、呉瑛の『両極』は『文選』賞に、山丁の『山風』は『盛京日報』文芸賞に当選した。

しかし、文芸界の二派による論争は一向に収束しな

った。だが、文叢派がしだいに優勢を占めつつあった。この時はもうすでに一九四〇年を過ぎていた。

一九三九年 二五歳

この年の春、仲間と特集『雪竺を記念する』を執筆した。

文学活動一筋に精を出したため、日常の仕事に支障をきたし、扶余にある税務署に飛ばされた。山丁はこれが明らかに左遷だと意識した。さらに一年のうちに二人の娘を相継いで亡くしたショックも重なって、扶余税務署に赴任してまもなく、辞職して再び長春に戻った。

一九四〇年 二六歳

春、若い詩人の楊葉の紹介で、満映の脚本家になった。在職中、数多くの脚本を書いた。

この時期、『詩季』が創刊された。山丁は『詩季』創刊号に『序詩』と『船乗りの歌声』および、長編詩『砲隊街―墓なしの阿金に捧げる』も発表した。後書きに『詩は文芸の魂』を書いた。

この年、『華文大阪毎日』に評論『梅娘の創作―“小姐集”から“第二代”まで』を発表した。

この年に、『満洲文芸家協会』の会員に、翌年に該協会の委員に指名された。

一九四一年 二七年

山丁の小説『山風』は『盛京日報』文芸賞を獲得してから、秋螢の紹介により瀋陽で袁犀（李克異）と知り合い、良き友人になった。

袁犀が北平（北京）に行くとき、梅娘と柳龍光夫妻を紹介した。

『梅花嶺』を『大北新報』（後、山丁短編小説集『郷愁』に収録）に連載した。

秋、『近代世界詩選』と詩集『季季草』を編集、出版した。

この年に、映画脚本『女傑』（原題『巾幗男兒』）が映画化された。監督は王則で、満映の作品である。

一九四二年 二八歳

春、妻の呉榮秀が病死した。葬式のために、三百元を借金した。返済のため、『大同報・夕刊』に小説を寄稿するようになった。長編小説『緑の谷』はこの時期から夕刊に連載された。連載の途中から、日本人翻訳家大内隆雄の手によって翻訳され、『哈爾濱日日新聞』で連載されはじめた。『緑の谷』は二か国語による単行本がある。中国語版は長春文化社の出版、日本語版は瀋陽吐風書房の出版である。

この間、進歩的な作家と接触すると同時に、作品の刊行、出版の便利を計ってもらうために、編集人の王則、季風、葉未行、呉郎、呉瑛と連帯関係を保った。

小説『熊』を『満洲文芸』（後に、短編小説集『郷愁』に収録）に発表した。

この年に、映画脚本『歌姫の恨』（原題『歌女恨』）が映画化された。監督は朱文順で、満映の作品である。

一九四三年 二九歳

春、女流作家呉瑛の紹介で、左蒂（羅麦）と結婚した。

九月、『緑の谷』が長春文化社より出版された。内容に反満抗日の感情がこめられていると摘発され、弘報処から発行禁止処分にされた。友人の尽力で、“消除済”処分を受けて（問題とされる箇所の頁を取り除かれること）、ようやく発行を許可された。

『緑の谷』の出版、長詩『拓荒者』の発表、季風の脱獄などが原因で、ついにブラックリストに載せられ、二回にわたって、家宅捜査された。一挙手一投足を監視された。妻の羅麦と友人の助けで、九月三十日に長春を脱出し、北平に向かった。

長春を離れる前に、短編小説集の原稿を張辛実（映画監督、故人）に託した。この小説集『郷愁』は“新現実

文芸叢書”第二集として、長春興亜雜誌社から出版された。この短編集は計十編あまりを収録している。「序」は山丁が一九四二年七月に書いた。

北京に到着後、すぐに袁犀に会いに行ったが、あいにく袁犀は喘息で入院中であつた。やむをえず、午前中に北平の名所旧跡を見物したり、図書館で資料を閲覧したりして、午後、袁犀を見舞った。涼しくなつてから、袁犀の喘息が快方に向かい、退院した。

妻の羅麦も長春に居づらくなり、長女を連れて北平にたどり着いた。三人の生活を維持するため、袁犀の紹介で、新民印書館で編集をやりはじめた。生活は何とか落ち着いた。

八月、長編詩『拓荒者』を『青年文化』創刊号に発表した。この詩の発表後、新京警察署（長春）の特務がこれを整理分析して秘密調書を作成し、山丁の反満抗日の証拠とした。この秘密調書は、『東北文学研究資料』第六期（一九四九年十二月出版）の「文芸、演劇を利用して思想活動を行うことについての偵察報告・二級」の中で、はじめて公表された。山丁の活動についての記録は克明に書かれている。

一九四四年 三〇歳

春、『民衆報』の副刊『文学十日』に中編小説『精神病院にて』（一時『葦』と改題したが、一九九一年に原題の『精神病院にて』にもどし、中短編小説集『天のはてに伸ばした大地』に収録した）を連載した。

夏、袁犀は保護の傘のもとで、華北で創作活動の足場を固めることができるようにするため、第三回大東亜文学者大会の出席資格を山丁に譲った。柳龍光の協力のもとで、華北地区の十一名の代表と南京に赴いた。

新民印書館で編集の仕事をする以外、柳龍光の要請で雑誌『中国文学』の編集もした。この雑誌の総編集者は四人で、編集は交代制を採っていた。山丁は三、七、十一期を編集した。このほかに詩の特集号を出した。創刊にあたって、『詩人に寄せて』を書いた。

華北では、詩人の南星、作家関永吉、農民文学作家馬驪、散文作家の林榕と知り合った。

夏、第三冊目の小説集『豊年』が『新進作家集』に選ばれ、新民印書館から出版された。

南京の第三回大東亜文学者大会を終えて、北平に戻ってから、北平国立芸術専門学校の文学講師兼図書館主任となった。西城から東城のある四合院に引っ越した。

この年、散文『随筆二則』を雑誌『国文』に、散文

『望空之簡』を興亜雑誌出版社の『並欣集』に、小説『小さな町トールハにて』を『創作連叢』に、小説『北京』（後に、『黒市』と改題）、『祭献』、『両家親』などを短編小説集『豊年』に収録した。

次女、梁大汶（羅右）が生まれた。

一九四五年 三二歳

春、袁犀と北平地下共産党の地下活動に参加し、海燕書店を創設して党の連絡場所にした。中共北京市委員会城工部の委託を受けた趙冬日がやってきて、袁犀と雑誌社の設立について相談した。社名は『群力社』と名づけた。

十一月に袁犀と大型の文芸雑誌『糧』を創刊した。

十一月十二日、袁犀、袁犀の二人の弟、維剛（潘楊）、維光（路毅孚）と趙冬日の手配で、北平を出て平西弁事処に、さらに張家口に赴いた。晋察冀組織部の手配によって、何長工が卒いる抗日大学幹部大隊とともに、東北解放区に入った。

十二月、遼西行署で遼寧省委員会書記の陶鑄、行署主任の朱其文と会った。山丁と袁犀は現地に残り、遼西文聯設立に取りかかった。

『創作手記』を『糧』に、小説『書』を『中国文学』

上』に発表した。

一九四六年 三三歳

二月、部隊と鄭家屯に到着した。遼原連合中学の校長を務めた。

四月、袁犀、姚周潔と一緒に接管管理工作をおこなうため長春に赴いた。

五月、洮南まで撤退し、洮南連合中学校長、“教聯”主任を務めた。『草原』第二、三期を編集した（第一期は袁犀が編集した）。山丁の詩『中国の火炎』と『編集後記』は『草原』の第二期に載せた。

この年、共産党組織に入党の申し入れをした。党支部の大会を通して、上層部の党組織に書類を提出した。しかし、仕事は頻繁に移動するため、許可は停頓した。

長編小説『緑の谷』が西満宣伝部に審査され、「進歩的である」という結論がでたが、後の反右派闘争で不正な批判を受けた。

一九四七年 三四歳

春節の後、洮南の土地改革に参加し、学生を引率して前方へ慰安活動もした。

革命工作の必要に応じて、一部の学生を選抜して、東北大学に入学させた。

靳韜光、楊春榮、張景儀などはみな五十年代または七十年代の党の中堅幹部になった。

冬、省政府に戻り、整風運動の学習をした。

この年、梁詠時のペンネームで『勝利報』に『九つの感想』、『魯迅と東北青年』などを発表した。

一九四八年 三五歳

三月、遼西を離れ、哈爾濱に向かった。東北局の手配で東北文協で秘書の仕事をした。

『生活報』創刊後、山丁は文芸編集をしながら、記者も兼任した。この間、仕事以外にまた鄧立、馬庸のペンネームで『生活報』に『英雄よ！共産党があなたを育てた』など十数篇のレポートを書いた。

十一月一日、瀋陽が解放され、瀋陽に転動した。『生活報』、『生活知識』、『東北青年報』の編集者、編集委員、記者組組長などを歴任した。東北青年出版社の審査科長も担当した。

この時、山丁には三人の子供がいた。梁大成、梁大汾（羅顥）、梁大汶（羅若）である。

一九四九年 三六歳

年明け、瀋陽に引越した。

山丁は鄧立、馬庸、伯利、阿庚、項練、詠時、林西、

立、駱成驤、蘇泉などのペンネームで、劇の評論、書評、散文、映画評論、雑文、評論などスタイルの違う文章を三十数篇を『生活報』、『生活知識』に発表した。

六月十九日、『生活報』に『指導者と文豪』を、七月二十六日、『生活報』に『中国文学を研究しているソ連の友人』を発表した。

同年、東北文聯に吸収され、東北作家協会会員になった。その代表として瀋陽で開かれた『東北文代会』に出席した。

一九五〇年——一九五一年 三七歳——三八歳

四月、馬庸のペンネームで朗読劇『中国の丹娘——劉胡蘭』を『生活知識』第一期に発表した。

鄧立のペンネームで『生活知識』四月号から十二月号にレポート九篇を発表した。

六月、朝鮮戦争が勃発した。アメリカが朝鮮を踏み台にして、中国に侵攻してくるという危機に襲われた。

十月、新中国を守るために、中国人民志願軍が鴨緑江を越えた。山丁は続けてペンネーム鄧立で筆を振るった。

一九五一年、朝鮮慰問団に随行して、朝鮮に渡った。第七分団（東北地区）に配属され、秘書兼記者を務めた。

『第四発玉——運転手が歩兵銃で敵の飛行機を撃墜』など

のような戦地レポートを国内に送った。

同年、朝鮮より帰国。

一九五二——一九五三年 三九歳——四〇歳

東北人民出版社文芸組組長、創作組長を歴任した。

一九五三年、妻の羅麦が北京の共青团に転属された。

山丁の負担を減らすために、羅麦は二人の娘を連れていった。末息子山丁の側に残った。

この年に、焦勇夫、于雷、王海などと脚本『沙河橋岸の物語』を創作し、人民出版社から発表した。『新觀察』と『東北日報』の副刊にも転載された。

一九五四——一九五五年 四一歳——四五歳

一九五四年、山丁は人と合作して『営業員孫芳芝』を書いて、東北人民出版社から出版した。

春、東北人民出版社から遼寧省作家協会に転職した。

編集室副主任（主任は羅丹）を務め、『文学月刊』の編集、出版および対外連絡などに従事した。

一九五五年、肅反運動がはじまった。胡風と関わりがあったため、十ヶ月も取り調べられた。以後、省の作家協会創作委員会でも秘書をした。

一九五七年、反右派運動がはじまった。山丁も地方へ出向いて遼寧省各地の作家協会会員の意見を求め歩いた。

戻ってから工作報告を整理した。省政治協商会議の書面発言を『教条主義を倒せ』という題で『遼寧日報』に載せて、意見を述べた。何が何でも5%の右派を見つけたさないとけないという規定のために、山丁も右派から逃れることができなかった。さらに、満洲時代の作家でもあり、小説『緑の谷』は日本語に翻訳されていたこともあり、たちまち漢奸罪で懲役十年の有罪判決を言い渡された。一九五八年三月のことであった。

一九五九——一九七九年 四五歳——六六歳

一九五九年二月、瀋陽第二監獄（大北監獄とも言う）に収容された。服役期間中、自分の文学才能を活かし、『労改報』の文芸面を編集した。後に、収容所内の工場で校正をしたり、運搬工をしたりした。三年間にわたる自然災害は、当然ながら、山丁の健康を損ない、ついに倒れた。

一九六八年に、十年間の刑が終わり、釈放された。しかし、この時期は文革の最中で、山丁は瀋陽市新生化学

工場（第一労改支隊）に就職させられた。宣伝工作、運搬、貨物積みおろし、炭団のふるい分け、倉庫保管など一通りの仕事をした。

一九七六年に「四人組」が失脚し、中国共産党は第十期三中全会が開催され、各政策を具体化した。

一九七九年六月十四日に、山丁の申請により、省委員会は「本人は元の務め先に戻る」という結論を出した。こうして、五つの真つ赤な判が押された公式文書によって、二十二年間の囚人生活は終わりを告げた。省作家協会に戻った。しかし、梁山丁はすでに六十六の老人になっていた。

「下」では、梁山丁が名誉回復されてからの生活と創作活動を紹介する。その生き方は、まさに、「寵辱に驚かず、山翁は老いず（榮辱を気にしないので、仙人のように不老不死である）」と言えるものである。

（大谷大学専任講師）